

「次の依頼書をくれ」

ニューヨーク郊外に住む魔術師ニコル・ブラウンがそう言う。後ろにある本棚の中からぶ厚いファイルが出た。ファイルはブラウンの前にふわりと舞い降りるとさっと注文内容が書かれたページを開いた。

「えーっと・・・依頼主はフランスのあいつか。使用目的は・・・妖精を召喚する杖？」

ブラウンがそうつぶやくと部屋の間にあるロッカーからよく乾燥させておいたハシバミの木の枝が出てきてブラウンの手に収まった。

「長さは4フィート、太さは老人の杖程で先端にストーンを入れるためのインチ程のくぼみが欲しい。っと」

依頼内容を読み上げている間、ハシバミの枝はブラウンの魔力で切られ削られ、読み上げた通りの白木に加工される。

「ニス」

ブラウンの言葉に工具入れのふたが開き中から薄茶色のニスが入った瓶が現れると、ふたを開けながらふわふわとブラウンのそばに来た。

ブラウンはふーっと軽く深呼吸をすると杖の仕上げのために神経を集中させ呪文を唱えた。

「魔術師ニコル・ブラウンが告ぐ。汝フランスの魔術師カミール・バシユレのために働く杖なり。カミール・バシユレのために妖精を呼び寄せるための杖なり」

ブラウンが呪文を唱えている間、ニスは小さな水玉となって瓶から飛び出ると青い光となって具現化するブラウンの魔力と戯れるように杖の周りを舞った。

「妖精を呼び出すための笛なり。カミール・バシユレの魔力を増幅させるための装置なり。我ニコル・ブラウンが作り出しカミール・バシユレのための杖よ。かの地に届きし暁には我の名を広めるために良く働け。そしてカミール・バシユレを助けよ」

ブラウンが続きの呪文を唱えている間、ニスと魔力が混ざり合ったものは帯状となって杖を包み一瞬強い光を放った。

カラン

乾いた木材が床に落ちる音を聞くと、ブラウンはふーっとため息をついてから床に落ちた杖を拾い確認のために目の前に掲げた。

杖は高級家具のようにつやつやとした光沢を放っている。

ブラウンは自分の魔力がしっかりと入ったかどうかの確認をするために杖を一撫ですると「よし」と満足げに微笑んだ。

その微笑みと同時に梱包資材が動き出す。

ブラウンはクッション資材が杖をぐるぐる巻きにし始めたのを確認すると、杖から手を放しデスクの上に置いていたコーヒを一口飲んだ。

カランカラン

玄関が開いたことを知らせるドアベルの心地よい音が耳に入ると、ブラウンはアトリエから出て玄関に向かった。

「おかえり。今日は大分走ってきたみたいだね」

「あ、師匠。はい。天気が良かったのでいつもより長く走ってきたんです」

ソフィアがテーブルに置かれたスポーツドリンクを飲むために上を向くと、タンクトップからマカップの胸が作るはっきりとした谷間がちらりと見える。

谷間を作る豊かで丸みを帯びた胸の下にははっきりとくびれた腰が続き、日々のジョギングで鍛えた足は筋肉質で細くすっきりとしたシルエットを作っていた。

ソフィアは現在23歳。サンフランシスコで教団を運営している父親がブラウンの元弟子で、幼い頃から父親の元で魔術師としての基礎を学んでいた。

タロット占いの才能があったので専門的に学んだ後占い師として活動をしていたが、自分にもお守り作りなどの魔術師が持つスキルが必要と感じブラウンの元に来ていたのである。

身長153cm。ややクセのある肩甲骨までの黒髪をポニーテールにしていることが多い。

ふっくらとしたコーラルピンクの唇と黒い瞳が特徴的な顔は目が大きく、目鼻立ちのはっきりとしたヨーロッパ系の顔立ちだった。

母親が日系なせいかアイメイクを切れ長に書く和在米日本人モデルのような顔になり女友達からうらやましいといつも言われている。

ジョギングを日課にしているので腕と顔は日焼けをしているが、動きに合わせてちらちらと見える部分を見れば彼女の元々の肌の色は色素が薄い。かたやブラウンの身長は175cm。

ホワイトブロンドの髪が目を引き、次に「ダビデ像とそっくり」とよく言われる目鼻立ちのはっきりとした顔が目を引き。茶色い長袖のシャツとジーンズに覆われている体はほっそりとしているが男性的な印象で、レストランではいつも女がテーブルの担当だった典型的なヨーロッパ系である色素の薄い肌。そしてその肌の色に良く映えるワインレッドの瞳。指関節が目立つごつごつとした手。

肩までの髪をハーフアップでまとめているブラウンは30代か40代のような見た目をしている。しかし実は自作した魔法薬で不老長寿になった今年500歳の大魔術師で、ホワイトブロンドの髪は全部白髪だった。

ソフィアは今一度スポーツドリンクをのどに流し込んでいたが、その最中にあることを思い出した。「ところで師匠。友達から縁結びのお守りの依頼を受けたんですが、どうしてもじっくりこないんです。シャワーを浴び終わった後でどこが悪いのかチェックしてもらっていいですか？」

「ああ。いいよ」

「ありがとうございます。私のバスタオル」

そう言いながらソフィアが手を叩くと自室からバスタオルが一枚飛んできた。

ソフィアは慣れた様子でバスタオルを片手で受け止めると、さっとバスルームに向かった。

数日が経過したある日の晩、ブラウンはシャワーの蛇口を閉めながら所属する魔術結社の会合で行われる儀式の事を思い出した。

(そう言えば、そろそろソフィアをメンバーに紹介しないとだな)

三カ月に一度行われる会合での儀式は男女の魔術師がペアになって信仰している神に性行為で生じるエネルギーを捧げるという内容となっている。エネルギーを捧げる役は儀式に参加する者たちで持ち回り制。

今回はブラウンがメンバー内の女性の誰かと性行為をして神にエネルギーを捧げる順番だった。

ブラウンはバスローブを着るとシャワールームから出た。

儀式のメンバーに弟子を紹介するという事は即弟子を儀式へ参加させる意思表明となる。

もしブラウンの弟子であるソフィアがすぐ儀式に応じることが出来なければ、魔術師を仕事相手にするブラウンは大魔術師としての面目を保てなくなってしまう。

(さてさて・・・どうしたものか・・・)